総合的な学習の時間部会（中学校）

県研究主題 生徒一人ひとりの生きる力をはぐくむ指導計画及び指導の工夫・改善

提案１　　提案者　和田　盛孝（湘南三浦地区）

＜研究主題＞ 探究的な学習としての充実　探究活動のまとまりとなる単元作成及び地域や学校、生徒の実態等に応じた学習課題の設定の工夫 ～防災教育を通して、自ら考え自ら判断する力を育む～

１　提案内容

藤沢市立湘洋中学校は波打ち際から校庭まで約100ｍ、海抜約３ｍという立地である。現状では南海トラフを震源とする地震等がいつ起きてもおかしくないという指摘もある。そういった状況の中で、生徒の津波に対する関心や危機感がない現状で、自分の命は自分で守る（自助）力を付けることが必要と考え、防災学習を核とした授業を展開した。

（１）実践上の工夫

①　学習指導要領に沿った年間計画の工夫と改善

各教科の取り組みに、防災の視点を入れた。理科では地震のメカニズム、社会科では自然災害、保健では自然災害下における傷病の防止策や応急手当、家庭科では家庭でできる防災対策学習、その他音楽や美術においても、その視点を入れ、教科横断的な学習を心がけた。

②　理科の授業で課題設定

１年生の理科の授業で地震のメカニズムを学習するとき、この地域を教材として利用し、避難方法を地図ソフトの活用により、話合い活動から発表活動を行い、学びを深めていった。

③　防災巻

地震発生時に避難する物語を、探究活動を通じ１枚の紙に表現した。できたものを同じ地域に住む仲間と見て、付箋を活用し話し合い、防災巻を見直す過程から「個→集団→個」のサイクルを意識させ、防災巻を作成させた。

２　協議内容

（１）　質疑応答

Ｑ　自分事として捉えるために課題設定において工夫していることは何か？

Ａ　東日本大震災を例に、津波の現状を伝えるなどの工夫をした。

Ｑ　各学年での防災教育の取り組みはどうか？

Ａ　今回は２年生で防災巻を２回繰り返し行ことで、深まりを見せた。各学年での実践の分析はまだ行ってないので、今後は設定を変えるなどの負荷を与える中で行いたい。

（２）　グループ協議　「各地区での防災教育について」

・「学校から地域」、「地域から学校」というような地域との関わりが大事である。

・町内会との連携等、地域とのつながりが重要。防災教育で「命の大切さ」を考えることが課題である。避難生活や復興を意識すれば、命の大切さに自分たちの思いが強まるのではないか。

・各校の防災教育について意見交換し、防災学習は自分事への意識を高めること、生き残ることをイメージすることが大事。全体計画からカリキュラムとのバランスを整理する必要がある。

・各地域の防災教育について情報共有し、ある市では地域と連携して体験学習を行い、他の市ではＤＩＧ体験、防災訓練にシェイクアウトを取り入れた。地域との連携の必要性を再確認した。

３　まとめ

（１）　指導講評

今回の実践は地域の課題、生徒の実態を鑑みて、展開されていることが大変素晴らしく、各教科との連携は見習うべきである。東日本大震災以降、地震や津波が生徒の身近な問題に変わった。

このことから、学ぶ意義や学ぶ必要性を生徒が感じ取り、主体的に学ぶ姿に変わっていく。総合的な学習の時間は教科書もなく、目標についても各学校が学校教育目標や地域の願い、生徒の実態に即して決め、目標にしたがって創意工夫で指導内容を決めなければならない。

指導内容を考えるにあたり、学習指導要領の配慮事項を参考にして行うことが重要である。今後、子どもたちの将来は人工知能が仕事をするなど、変化の激しい社会に向かうためにもこの時間の展開が大変重要になってくる。

（２）　全体協議「子どもがさらに主体的になる探究的な学びの工夫について」

・主体的になることは学習課題を身近に感じ、生徒の必要感に迫っているか。教員の働きかけや問いかけで「なぜ、学んでいるのか」などにより、生徒は自分事として考えるようになる。達成感を味わわせることで、自己肯定感が向上する。
・学ぶ意義をしっかりと理解させ、互いに認め合う活動を行う。地域材などは一度ではなく、継続してつなげ、生き方のヒントを学ぶ。
・主体的、探究的とはどのような姿なのかを話し合い、主体的となるには動機づけがあり、探究的になるには情報を精査し、結びつけることができるとまとめた。生徒にどのような力を身に付けさせたいかを明らかにして、単元を構想する。
・他の人に見てもらうことが主体的になり、生徒の姿を明確にし、教員で共有し、担当任せにしない。生徒より教員の体制をどうするのか、しっかりとすることが重要。
・主体的、探究的にするために地域性を活かす、何を身に付けさせたいかを明らかにし、様々な学習から学習内容を精選し、右肩上がりになるように繰り返し学習することが重要。
・地域材を活かし、生徒たちの切実感をもたせ自分事にすることが、主体的になると考える。
・発問が大事で、教員の指導性による。思考ツールの活用など、自己肯定感の育て方が重要。

提案２　　提案者　宮川　勉（横浜地区）

＜研究主題＞
未来を拓く横浜の教育～社会に開かれた横浜らしい教育課程の創造～
■教科等におけるカリキュラム・マネジメントの確立■
～主体的に学び続ける総合的な学習の時間の単元構想の在り方～

１　提案内容

総合的な学習の時間のねらいを達成するため、学習指導要領の目標にも書かれているとおり、生徒が主体的な学びをすることが不可欠である。この『主体的な学び』の実現のためには、単元構想をいかに行うかが問われる。しかし、総合的な学習の時間では、「各学校の目標」「学習内容」「学習活動」「評価」を各学校で設定することとして、学校に任される部分が各教科等と大きく異なる。そのため、単元構想も考えにくいといわれ、そこで横浜市では小学校と合同で、総合的な学習の時間部会において 20 回以上の検討を重ね、単元を構想するためにどのように考えてきたのかを「単元を構想するためのシート」での分析を行った。

（１）研究内容

単元の構想に特に必要な要素として、「子どもの実態」「身に付けさせたい力」「材」の３つが挙げられる。これらの視点で、教員が的確な観点から分析する必要がある。また、相互の関係性において各項目を充実させることが重要であり、最終的に「材」を価値付ける重要な役割を果たす。「材の価値」が明確になると、単元のゴール時点での生徒の姿が明らかとなって、その後の単元構想を明晰に行うことができるようになると考えた。

「単元を構想するためのシート」を用いた分析の具体例として、２つの実践提案を挙げた。

①「社会の輪の中に飛び込もう」（２学年）

「単元を構想するためのシート」で再考した結果、以下の改善点が見えてきた。

ア『自分から行動すること』の重要性に気付かせていきたい。

イ『与えられている単元』から、『主体的な単元』に変えていきたい。

「やらされ感」では自主性が養われにくく、「これは必要なこと」と生徒に感じさせたい。そのため、「子どもの実態」「身に付けさせたい力」「材」の３つの視点からウェビングの手法で「材の分析」を行った。この場合の「材」は、「働く」ということである。この結果、生徒が総合的な学習の時間の中で実際に行う活動を教員側が具体的に考えることができた。

『今までは「挨拶」や「マナー」などが大切であると考えたが、職場の方やお客様との関わりを通して、「コミュニケーション能力」は必要と感じることができた。自ら計画して学習することで、「先を見通して行動」する力を身に付けていきたい』という「子どものゴールの姿」を明確にすることができた。実践では授業の導入を工夫し、事前の職業学習にも生徒は主体的に取り組み、日常生活にも変容が見られた。

②「つかんでふみだそう！　ＴＨＥ体験　北海道長沼町」（３学年）

「単元を構想するためのシート」での分析の結果、以下の点が挙げられた。

ア疑問や気付きを生かすことが大事

生徒の意見や考えを取り入れる場面を多くつくることで主体的な学びにつなげていく。

イ材について

この町の価値は大きく、農業の課題、暮らしにおける多様な価値観を知り、自分を見つめるよい機会にしていきたい。

①と同様にウェビングを行うことで、『北海道は寒さ対策のために二重窓を設置している家の構造や、自然にあわせる暮らし方も横浜と比べるとずいぶん違った』『お世話になった方々が、これからも花や野菜を作り続けるために、自分でも応援できることは何があるかな。日本の食を支える人々の現実は、とても厳しいものであると考えさせられた』などに気付くことができる子どもの姿をイメージすることができた。

また、「単元を構想するためのシート」を用いた分析によって、この単元でどのような探究活動ができるかという教員が見通しをもてた。指導する教員側が探究活動の一連の流れを見通せ、調べ学習で気付いた問題点を自分の課題として捉え、農業体験学習を終えた後も解決に向けて行動しようとする生徒を育てることができた。

２　協議内容

研究主題にある「主体的に学び続ける」とはどのような姿なのか話し合われた。

・提案では、自分の答えを自分で見つけていくことができる生徒とされ、生徒自身が感じた疑問を自分で調べることができる。また「主体的に学ぶ」ではなく「主体的に学び続ける」としたのも、疑問を解決するために実際に体験し、また新たな疑問をもつという学びの継続性を示す。
・職業体験や修学旅行など一回の体験で終わらず、中学卒業後も学び続ける生徒を育てることを考えたのが本提案である。さらに「単元を構想するためのシート」を実際に作成する時期について話し合われた。
・年度前や行事の前など具体的な時期を決めることが大事ではなく、作成する際に生徒の考えや指導する教職員が把握するために行うことが大切とされた。シート作成により、材の力やその可能性を明らかにでき、そこから授業展開を考えることが、授業改善につながるのである。
・ウェビングは校内の総合的な学習の時間の担当が行うべきか、学年職員が行うべきかを話し合った。横浜市では、現状中学校においてウェビングの手法はほとんど行われていない。一方で小学校はクラスごとに担任が行う例が多く見られ、学年全体や総合的な学習の時間でチームを組んで行う場合もある。小学校で多く見られるように学級担任など個人で行う際、ウェビングにより自分の趣味・嗜好が分かる利点があるが、あくまでも自分の分析になってしまうことに注意が必要である。したがって、単元を構想する場合、生徒を主語に置くことで生徒の行動を具体的に考えられるようにすることが重要である。

３　まとめ

今回の取り組みの「単元を構想するためのシート」は、横浜市が新規に作成したものでは決してない。文部科学省から出ている「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（平成22年11月中学校編）」の86ページに「単元構想図」が提示され、横浜市はそれを元に作成している。

また、総合的な学習の時間が学校で主体的に行われるようにすることは総合的な学習の時間が導入された平成10年から言われていることである。

生徒が中学校卒業後も学び続けるためには、活動ありきの総合的な学習の時間の授業から脱却し、どのような力を育てるかを明確にする必要がある。そのために、今回「単元を構想するためのシート」を用いて分析したのである。このシートについて研究中であるが、そもそも単元構想シートの作成が本提案の目的ではなく、材の分析をすることで、人やものの価値に指導する教員が気付くことで、生徒が主体的に学び続けることができる総合的な学習の時間を作り上げることができる。

最近行われた調査では、日本の労働人口の49％が就いている職業が10～20年後には人工知能やロボット等で代替可能になるという結果が出ている。したがって総合的な学習の時間を通じて、他の教科には見られない『答えがない』という経験をすることで、現代とは異なる状況の社会においても潰されないような人材を育てていくことが必要である。

４　総括

学習指導要領の改訂に向けて

各教科の「見方・考え方」を総合的な学習の時間の課題解決において、総合的に活用する。実社会や実生活との関わりで見いだされる課題を、多面的・多角的に俯瞰して捉えて考える。現在及び将来の自己の生き方につなげる、いわば内省的に考えることが必要である。

カリキュラム・マネジメントの観点から、教科横断的な視点で内容を組織的に配列しＰＤＣＡサイクルを確立し、人的・物的資源を活用し、無理のない範囲で考えていくことが必要である。